

## 令和7年度 県立長野図書館協議会（第1回）議事要録

### 1 日時

令和7年（2025年）9月24日（水） 午後1時30分～午後3時30分

### 2 場所

県立長野図書館 3階会議室

### 3 出席者

<委員（五十音順）>

渡邊匡一会長 大林晃美委員 春日由紀夫委員 瀧本明子委員 田川圭子委員

田中一樹委員 西山卓郎委員 庭井史絵委員 松山佳奈子委員

<県立長野図書館>

森館長 山田副館長兼総務企画課長 祖堅副参事兼資料情報課長

犬浦課長補佐兼情報係長 羽入田専門幹兼総務係長 槌賀企画係長 小澤資料係長

丸山主任 久保主事 松峯主事

<長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課>

市村課長 馬場課長補佐 干川主査

### 4 会議次第

(1) 開会

(2) 館長あいさつ

(3) 職員紹介

(4) 会議事項

ア 「第5次長野県子ども読書活動推進計画」の実行に向けて

イ その他

(5) 閉会

### 5 会議の概要

(1) 館長あいさつ（要旨）

皆さま、本日はお忙しい中ご参集いただき、ありがとうございます。現在の委員体制になって、2回目の会議となります。

当協議会は、例年秋に、テーマを設けての懇談、春に当館の取組状況の評価をしていただくというサイクルで開催しております。本日は、「子どもの読書推進活動」をテーマに、庭井先生に話題提供をいただき、ディスカッションできればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(2) 話題提供

アドボカシーから実行へ -第5次長野県子ども読書活動推進計画への期待-  
青山学院大学教育人間科学部 庭井史絵准教授  
(別添配布資料のとおり)

(3) 配布資料

- ・ 欠席された中村委員からの意見書 (別添意見書のとおり)
- ・ 第5次長野県子ども読書活動推進計画【概要】 (別添計画のとおり)

(4) その他

参考資料「第75回長野県図書館大会 ご案内」  
「モノコトフェス#2」  
(館長より説明)

(5) 委員との主な質疑応答、意見要望

「第5次長野県子ども読書活動推進計画」の実行に向けて

<渡邊会長>

欠席の中村委員には意見書を提出してもらった。内容も豊富で適宜質問をしていく中でまた繋がればということで、どこからでも結構ですので、ご質問等から始めていきたい。

<森館長>

庭井委員のお話の中でも出てきたが、フリースクールと連携して何かしている事例はありますか。

<瀧本委員>

飯田市の駅前図書館は不登校のお子さんを支援する飯田市教育支援センターと接している。そのため初めから何か連携できたらいいねという話があって、お隣同志と一緒に活動している間に、支援センターの子供が図書館に寄って、「親子でこういう活動してみたいがこういう本はないか」とか、支援センターの活動で皆でお料理を作ろうとなったときに「どんなお料理を作ろうか、図書館の本をしてみる」ということもあった。図書館が隣にあったということで気楽に組織としても使っていただいているし、通ってきてくださる方も図書館がきっかけになって、図書館だけではなく一緒に何か活動する人とつながるといったようなこともあった。支援センターがたまたま図書館の隣であったが目指していたことでもあったので、もう少し活動が広がっていけばいいと思う。

<春日委員>

中学校では人数は少ないが不登校が課題になっていて、東伊那公民館にその話があり中学校からアップルームとして不登校の子たちが公民館に週1か2日集まり公民館にある市立図書館の分館で読書をしたり公民館の講座に直接参加したり、公民館活動が小さなフリースクールみたいな感じでいろんな形で発展していけば面白いのかなと図書館にもお声をかけて使わせていただいている例はある。

<森館長>

フリースクールなど子供の居場所になれるような場所に、本やさまざまな学びの環境があって、そこの関わり合いで何か地域がいろんな繋がりができるのは、すごく素敵なことだしいろんな実践があるかと思う。田中さんいかがですか。

<田中委員>

フリースクールが一つの居場所となっている子たちは多いと思うので、そういう意味ではすごく効果的かなと思う。

フリースクールの話とはずれるが、私が住んでいるところの篠ノ井西小学校のクラスでは不登校の子も何人かいるが、それ以上に多国籍の二世三世の子が多い。クラスに3人から5人はいると言われている中で、そうした子たちへのアプローチをどうするか。子供は本を日本語で話せたり読めたりするが親は日本語を読めない。親は中国籍だけではないが日本語はわからないので子供に対して読書をさせてあげられない、読み聞かせをさせてあげられない実情があったりするので、私が活動として、その子供に親の代わりに読み聞かせる活動をしてたこともある。そういったアプローチが必要でこの推進計画へ盛り込みたいと思うが、そのあたりを聞かせていただきたい。

<森館長>

報告として先ほど出した「デジとしょ信州」の資料は、全ての自治体が参加されている「デジとしょ信州」の全体会議でご説明した資料。重点的な取組として、子供たちの学びの環境、多様性を包み込むインクルーシブな環境整備という視点で見るときに、フリースクールなど様々な居場所における読書環境の充実の一つの方策として重要だと考えている。田中委員がおっしゃったような外国にルーツのある方への情報提供になる外国語の本は、紙媒体で購入したり取り寄せたりするのはなかなか難しい。電子書籍なら、契約をすればすぐに使えるようになるので、英語や中国語はもちろん、ブラジルから来られた方のためにポルトガル語の本を選書していただいたりしている。一つは、やさしい日本語というアプローチです。もう一つは、母国語の電子書籍を入れていくことで、母国の言語や文化を家族内やコミュニティで共有できる手段になれば良いと思っている。どんな本にニーズがあるのか、当事者の方々や普段から交流をされてる方のご意見を伺いながら、選書していけるといいのではないかと思う。

<田中委員>

フリースクールからずれてしまいましたけれども、ありがとうございます。子供たちは本をすごい読みたい。一方、そうでない子供たちもいる。そういう子供たちには親の存在がすごく大事なので親への啓発活動というか、親が読み聞かせができる環境、母国語であったり日本語であったり、そういう環境を整えていく必要がすごくあって、それが本という形での子供たちの居場所に繋がっていくのかなって思うので、何かその子供たちへのアウトリーチももちろん必要だが、その本人になじませてくれるのは家庭の環境、親の環境だったりするので、そこをうまく子供たちにアプローチできるような家庭でアプローチできるような環境作りを図書館としてもやっていただければいいかなと思う。

<森館長>

家庭環境ということで松山さん、いかがですか。

<松山委員>

うちの子供が行ってる小学校では、読書週間があって強制的に子供たちが図書館に行って必ず本を読む時間が毎年2週間ぐらいあり家に持ち帰って本を読んでっていうようにしてるので、子供が本を読むのは今おっしゃったように親の影響とか家庭環境が大きいと思う。

<森館長>

ありがとうございます。西山さん、いかがですか。

<西山委員>

そもそも、この第5次子供読書活動推進計画の実行を県立図書館としてどう動いていくべきかという話ではないですか。

<森館長>

今日のテーマは正にそこですが、ただダイレクトにそこに入ってしまうと多分ちょっと狭くなっちゃうので、風呂敷広げるタイムかなと。

<西山委員>

了解です。学校図書館もしくは学校とかがって話かもしれないが、アウトリーチが大事だよねっていう中でフリースクールが出てきているが、アウトリーチでいろいろ思うのは1個はフリースクールの支援であっても何であってもそれなんかスクールに接続してる子供たちへのアクセシビリティの保障であるなという話がいっぱいあって、そこをどう捉えるのかなという話と、そもそもその専門的な話って学校図書館の方もしくは県立図書館の方が、そ

れはやりたいモチベーションで果たしてやれるのかなってということが僕は結構難しいんじゃないかなと思っていてその自分たち独自でやるっていうのは、アウトリーチをかつ本という手段で持っていくと、ただ本を押し付けてくる変な大人になりかねない。僕自身は小学校のときの読書活動で本当に本が嫌いになって、本ぐらい選ばせると、そのとき何を読んだか覚えてないが給食の時間流れてた謎の放送の内容だけめっちゃ覚えてるみたいな、そういうことがあったりするんで、何かそのバランスって実は本を手段として持つ第三者がやった方が実は効果あるんじゃないのかなという話は何かあり得るんじゃないかなって思うので、有機的なネットワークを構築するとは書いてあるが、それ具体的に誰とどうやって組んでってその予算どうするのかの話がないと本当に絵に描いた餅で終わっちゃうんじゃないかなってというのが1個思うのと、指標のところにも年間貸出冊数とかもありつつも基本理念が楽しさを全ての子供たちにとって言ってる意味で言うと僕らが長野県で子供に関して気にしなきゃいけないのは不登校の話と若年者の自殺の話だろうなと個人的にすごく思っているところがあるので何かそういう視点を踏まえてアウトリーチとかネットワーク等を作っていくのかという議論は真剣に考えるべきと思うが何も変化がなかったとなりかねないなっていうのを心配しているので、その辺何かお話ができれば僕は嬉しいです。

#### <森館長>

そうですね、どうしてもデジタルが特出しになりがちなんですよね。子供の読書活動といったときには何となく紙の本が最初にぱっと思い浮かんだりしますが、いわゆる物語を1冊読み切って心を豊かにすることも大切なんだけれども、それに加えて、探究的な学習のために一部分でも良いから必要などころを見つけて、それをちゃんと自分が咀嚼して、表現するところまでいくといった、調べ学習・探究学習には、紙の本とデジタルと、どちらも大切です。狭い意味での読書と、「知る」という幅広い探究みたいなところが融合しづらい点にいつも悩んでいる。包括的な観点で言えば、今まで届かなかった人にデジタルを活用することで届かせることができるんじゃないかということでは、庭井先生のお話の中にあっただように、紙の本だけだと読めない子たちに何とか届けたい楽しい読書の楽しさを届けたいっていうところもあります。「デジとしよ信州」で、全ての県民の方にそういう環境を使っていただけるようになりましたが、利用登録のために子どもを公共図書館に連れて来てくださる保護者の方もいれば、そうでないケースもあり、子どもが学校帰りに図書館に寄れるケースもあれば、安全面から寄り道はダメというケースもある。そうした状況の中で、学校による一括のID登録が始まった。それでも、学校に行きたくない子供たちはどうすればいいんだろうというところで、長野県で認証フリースクールが始まると聞いて、フリースクールもあの一括登録の対象になっていただいたらどうかということになりました。制度的な枠組みはもう1年以上前に作ってあるのですが、当事者の方にまだアプローチできてなくて、きっと、ご存知ないですね。

<庭井委員>

御代田町で支援しているフリースクールで最初にニーズがあったのは、昆虫の本とか。外で活動してしている子たちなんですね、教室で座学で勉強してるわけじゃなくて。畑で何か作ったり、お米作ったり、川遊びしたりっていう。子供たちが活動をしているときに浮かんだ疑問とか興味関心を読むことに繋がたら面白いよねっていうところから始まったので。どんな本が欲しいっていうと、やっぱり昆虫とか、料理の本とか、何か木で作る本とか。それはウェブサイトでもいいし、何でもいいっていうんですね。そういうもっと広い意味で、彼らは情報を必要としていて。図書館にこういう制度もあるといっても団体貸し出しですら「初めて知った」みたいな感じで言われて。なるほど、制度として本当に古典的な仕組みだと思うんですが、なかなか伝わっていません。一方で、例えば学校図書館支援センターなんかでよく用意している学習用何パックみたいなものっていいんですけど、役に立つんですけどでも、それだけでは駄目なんだろうなっていうのはすごく強く感じる場所です。もう一つニーズがあったのが、夏休みに学校行ってる子供たちのための講座って結構図書館で行われているんですが、それを平日昼間にフリースクールの子にやって欲しいっていうと断られる、あれは夏休みのイベントなんでみたいに言われちゃうって言われて。でも、ツールなんか、学校行けない子供たちは平日に図書館にも行けるわけですから、そういう今あるものを活用するだけでも、結構ニーズにマッチするのかなと思う。

<森館長>

大林さんいかですか。

<大林委員>

中村先生が「学校図書館支援センターの設置を望みます」の気持ちはすごくよくわかる。学校図書館はどこが本当にどうやって考えて、先生たちのこと、子供たちのこと、蔵書のことをどこがやっていくんだろうって、担当課はあるが、公共図書館が手を出せないところで課が違ってしまっているっていうところのそこを真剣にやってもらっている自治体もあるしその格差がすごく大きいなと思っているので、本当に学校の中でも孤立している。自治体の中でも置いていかれちゃってるっていう状況に置かれがちなところだなと思っているので、この本当に繋いでくれる人がいたらっていう思いはすごくよくわかるなとこれ読んで思います。私達も学校とどう連携をしようかってときにもう一步踏み出しづらいところがあってももちろん先生たちにじかにお話を聞いて連携、個別にはしていくがそれは応急処置的なところで、根本的なところの解決にはなかなかいかないなという現状の中で何を子供たちっていうところの視点かは、本当に何とかしたいなっていうのは思って、本当にこの計画を絵に描いた餅にしないためには、そういう何かもっとそもそものところをもうちょっとほぐし直していかないといけないのかなと思う。子供たちの意見を聞いていかなくはないだろうなっていう中では、この読書活動の現状調査っていうところでは何か子供から子供たちの意見とか子供たちの今現状っていうのを聞く何か手立てみたいなものは県では考えているのか。

<市村生涯学習課長>

今の段階で具体的にこういう調査をしてっていうのは、まだないんです。だからそれをこれから考えていきたい。ただ、それを県だけで考えてしまうとおそらくその調査内容が多分役立つようなものに多分ならないんじゃないかなというような感覚はあって、そのためにもう少し、今日ここにこれだけの皆様がお集まりですけれども、そういったようなものをちょっとどっちどういうふうにやってるかっていうとすいませんまだあれなんです、少しそういう中で調査もどいうふうにやったらいいのかどんな項目をやったらいいのかっていうのは考えていかなきゃいけないかなっていうふうには思う。

<田川委員>

ここにいらっしゃる方は皆さん読書が大好きで、感想文書くのも多分得意な方が全員そうかなと思うが、私少し文章も書いたりするが本を読むことと読書感想文を書くことは子供によってはものすごく乖離がある。読めるけど結構感想文って難しいんですよ、意外に苦手な子にとって本は読むけど感想文が嫌で読書が嫌いだっていう子が結構いると思う。今調査をどうしたらいいのかという話があった中で私今回ここに参加するにあたって最初に浮かんだのが文科省ではどうかと思うが、子供読書活動推進するには、まず読書嫌いな子供を集めて一体なぜ読書が嫌いなのかをまず調査するにはそこを最初につけば、読書の好きな子供はほっておいてもいいのかなと思う。要は読書嫌いな子供がどうすればこういうところに関心が向くのかを読書嫌いな人間を集めて、それには行政でそれをやるのは難しいとするならば例えば、既存の書店や本会社の人にもっと自由なことができる場所のノウハウを借りて面白いことを公共機関としてはやりにくいけれども、読書嫌いのためのなんていうんでしょうか、読書会とかあらゆる読書会とか面白い企画を立ち上げてそこから調査の糸口にしていくとかそういう本気でやるんだとするところがないと難しいのかなとか思って今日来ました。それと、今回よかったなと思うのは、読書はいわゆる出版された紙の本とかデジタル書籍と思うがいわゆる文字を文章を読む書を読むっていう現在も膨大なコンテンツがインターネットの中にあるんですよね。私も参加している SNS でノートっていうのはご存知だと思うが、あそこ本当にもう自作の小説からあそこ基本的にノートは比較的安全なサイトですので、例えば子供が参加してもいわゆる公序良俗に反するようなものってほとんど見かけない。管理してるところがちゃんとありますから何でも勝手に載せていいというわけではないので、例えばそういうものも読書というところに含めると、とても幅が広がっていいんじゃないかなと思うので必ずしもいわゆる出版社が出版したっていうものでなかったとしてもその中で自分の中のその何て言うんでしょう。心にかかるものがあればそれも読書というように認めてあげるのも一つの方策ですし、その中に結構膨大ないわゆる本に関する情報がたくさん詰まっているんですよね。ですからそういうものも例えばフリースクールの方たちはそういうものも利用するのも一つの方法かなと思った。

<森館長>

渡邊先生いかがですか。

<渡邊委員>

私も感想文は大嫌いでした。そんな話はちょっと置いておいてですね。フリースクール等々の話もとても大事なことだと思ってお聞きした。その最後の方に庭井先生の方で課題に出されていた情報の操作は非常に問題というか、前まで大学で情報リテラシーみたいな授業が普通に1年生向けにあったが最近それもなくなって、でもそもそも大学入ってからではかなり手遅れ感がいつもあるなと思っていた。なので、これがどのぐらいその学校の図書館でできるかどうかということ、それともいつも学校図書館でやらなければいけない一つとして情報をちゃんと扱う扱えるという基本的なリテラシーをどこで身に着けなければいけないのかといえば、小学校から必要なのかもしれません。でもそれよりも何よりもやっぱり情報をちゃんと扱うということ自体をきちっと身につけていくってことを、時間をかけてやっていかないと今の世の中で聞いている様々なことみたいなことも含めて考えれば学校図書館でぜひやりたいこととの中に、その問題はぜひ入るべきじゃないかと個人的には思う。

<森館長>

情報との付き合い方とか、いわゆる情報リテラシーが身に着けられるかどうかで、社会の中で生きて行く際に及ぼす影響は、今後ますます大きくなっていくだろうと思うし、AIとの付き合い方も入ってくると思う。就学年齢くらいの若いうちにそういった基本的なリテラシーが何らかの形で身につけられることが大切だし、「読書」の概念があまりにも狭かったり、強制されて読書嫌いになってしまった子に本音で遠慮なく話してもらえるような場、読書好きがいいことだみたいな前提の場にいるのは苦しいなっていう子たちが自由に話せる場は、チャレンジングな場作りだと思うが、西山さんいかがでしょうか。どういう場があったら嬉しかったということはありませんか。

<西山委員>

今ちょっと考えてみたのは公共図書館からは読書感想文を求められないじゃないですか。読みに来ても、そういうことかもしれないですね。特に結構大事だと思っているのは個人的に読んでどうでしたかっていう成果を子供時代にすぐアウトプット出せっていうことの方が社会として歪んでるんじゃないかって気はしてて20年後ぐらいあとに例えば、世界漫画でわかる世界の偉人で読んだなテスラみたいなこととかがいいみたいな。あのとき読んだあれが良かったみたいなことって20年30年後にならないとわかんないじゃんっていう前提のもとに大人がいないと、ただただ子供を早熟化させるだけのよくわかんないスピードが速くなっていく社会人に加担しちゃうだけだと思っています。外圧あるんですよ、多分。僕らは大人と大人同士なんで、成果は何だとか、どうだったんだとか言われるのをこらえながら子供にはそれ一切伝えないみた

いな、そういう場があると抽象的には僕は非常にいいんじゃないかなと今思った次第です。

#### <春日委員>

生涯学習という観点から見ると公民館の宣伝になっちゃいけないんですが、長野県の公民館は特殊で全国で一番公民館があるということで地域と密着している。うちの公民館にしても、さっき言ったアップルルームみたいな形で不登校の子がふらっと来たりとか、そういうところもありますし、もっと言えば毎日、子供クラブという放課後子供たちが過ごすものが、実は予算がないってこともあるが公民館の中でやってるわけです。公民館の中でも学校のような感じでもっと自由ですけど、図書館に併設している分室みたいなところに行って本を読んだりとか、そこで読み聞かせをしてもらったりとか、そういう姿もあるわけです。もっともう少し言うと、読書っていうのが先ほど西山さんが言われましたけども、その具体的な活動となかなか連携できない、本は読むべきだ、本を読むといいぞっていう、ただそこで止まっちゃってそのことと自分がやりたい、例えば虫を探してきてこれはどういう虫なんだと調べるような具体的な活動となかなか連携ができないことがあると思うが公民館はそこが割とくっついてできるんです。つまり、例えば何か講座をやったときに、それとプラス読書っていうものを連携していけば、例えば今年の夏やったのは竹の講座で竹でトンボを作ったんですけども、その竹について皆さん知らないと思うがすごく深いんです。それも本から吸収できることもあるし、そういう具体的な活動と連携できるっていう予算もある。だから皆さんは多分公民館はすごい固定的なイメージがあって私とは関係ないみたいな。特に若い人にとっては関係ないみたいな形のところがあるかと思うが、公民館は何でもできる場所なので、こういう視点を公民館との連携の中に作っていく一つ手があるんじゃないかな。横断的で有機的なネットワークの構築という一言が私は非常に勇気づけられて、簡単に言うと私は学校、図書館、公民館という三つの現場をやってみるとこれを連携すればもっと良くなるじゃんっていうのは、肌感覚でわかるんですけど、できない。なぜできないか、ということを考えている。これも西山さんが言われるように、人の気持ちがあっていいものあるじゃん、図書館もこういうこともできるよね。でもそれができないところは公民館でもできるんじゃないっていうものがあると思う。一つ言うと、なかなか連携ができないからコミュニティスクールという場を使って無理やり学校と公民館を連携させている。公民館からカリキュラムを学校に提供して、これで地域を学習してもらえませんか？校舎はこっちで準備します、場所も準備します、っていうようなことをやると、先生たちも乗ってきてやるわけです。こういうものを、ぜひ読書っていうものにも連携していけば、広がっていくんじゃないかな。繰り返しになりますが、具体的な活動と連携できる、そこをうまく使えば、もっと読書っていうのが楽しくなっていく、楽しくない奴にどうして楽しくないんだって言われても楽しくないもんっていう感じになっちゃうと思うがその楽しさの方をやってあげるのが大人の責任かなと思う。

#### <庭井委員>

すごく面白いと思ったんですけど、フリースクールで最初図書室作りの相談を受けたときに、

ある子供から、本って学校っぽいからいやだって言われたんですよ。本の存在そのものが、何か学校的なものを匂わせるから。その子はもう学校的なものは全部嫌だったので。身近に本を置きたくないっていう子もいたんですね。それでスタッフの方と相談して、8ページのスライド16の真ん中の写真がそうなんですけど、子供たちが遊んでるところに資料とか遊び道具を、別に強制も何もせずただ置いておくっていうふうにやっていたんですね、最初。そうすると、虫を捕まえてとか、何か木を見てとか、何かしたときに手にとる。そういう子でも別に本を読むと思わないように展示する。環境ってそういうことなのかなとお話を聞いて思いました。

#### <西山委員>

お二人の意見を聞いて僕も思ったのは、みんなの祭りを作ってそこにリベルテさんと上田の障害福祉施設の方、障害の方の生涯学習という文脈で事業を今年度やっているけど、ここで公民館を使わせていただいて祭りのリサーチをした結果の共有とあと物を作ろうっていうワークショップをやったんですよ。そのとき途中で来た子が1人いる、部屋に入れなかったんですよ。ただその後、お針子にシールを貼ろうとか、ちょっと竹を巻いてみようみたいなワークになったら来てくれて作業してくれたんですよ。これ多分さっきの話と通じるころがあつて部屋に入る入らないだと入れなかったのが、シール貼らないようになると入れるということは実感としてある。多分本もそういう感じで使えるといいんだらうなっていうのは、何か今お二人のお話を伺いして、それあれだったかもって今思っちゃってちょっとシェアしたくなったというところです。

#### <瀧本委員>

確かに図書館っていうとすごくまじめなイメージではあるが図書館の中にあるものを見ると、あらゆる分野のものがあって実は本もいろんなものがあるのでいろんな人たちといろんなことができるんじゃないかな。私達飯田の図書館で「図書館マルシェ」という催しをやって、大勢の出展の方がいらっしゃったんですけど、皆さんそれぞれに自分の好きな本とか学んだものとかを持っておられて、いろんな人たちといろんな関わりを持っていただける。先ほどからネットワークの構築っていう話もありましたけれど、いろんな方たちと一緒にやるっていうのが、図書館がよく使われるっていうことにも繋がるのかなと思う。それと中村先生のご意見に戻って申し訳ないんですけど、子供の読書活動の推進を考えたとき、学校図書館の取組がとても重要だと思っている。今長野県の中でおそらく学校の司書で正規職員の方は非常に少ないという状態の中で、会計年度任用職員の方が学校の中で誰とどうやって協力してやっていったらいいのか、熱心な先生方は、自分でこういうふうにやるっていうことができるが、多くの方たちは自分のやりたいことをどうやったらできるのかわからなかったり、探求とか、リテラシーを身に付けることは非常に大事だし図書館のやるべきことだと思っているが、どうやったらいいのかわからないという方たちがいっぱいいらっしゃると思うので、中村先生のおっしゃる学校図書館支援センターを作ってもらいたいっていうのは非常によくわかる。図書館の役割、特に学習センター、情報センターという役割を果たしていくには、教育委員会と図書館と一緒に、先ほどの庭井先生の

話題提供にもあったんですけど、政策の方に関わっていくような働きをしないと、なかなか変わらないんじゃないかなと思う。

<森館長>

ありがとうございます。学校図書館支援センターのような形で、組織として役割を果たせることが必要なんじゃないかというのは、本当に今日お話もいただいて、そうだなと思った。読書活動推進計画を立てるときに、こういったセンターを作る、組織を作という話は、計画には盛り込めなかった。今後、計画を実行していく実行部隊として、どうしてもそういう機能が必要だという声が高まってきたときに、まずは教育委員会の中で相談をしていくことができるのか。あるいは、一足飛びにセンターの設置まで行けなくても、まずはハブのような役割を果たしたり、モデル校を作って目に見える形で身近な事例を作っていくということも考えたい。その時に、学校や公共の施設の人たちだけではなく、きっと賛同してくださる方がいらっしやると思うので、手を結んでいきたい。それが、計画に言う「有機的なネットワーク」だと考えています。制度を作るところから始めると非常にハードルが高いので、まず具体的な事例を作っていくところから着手できたらいいんじゃないかという気がしますが、教育委員会としてはどうでしょうか。

<市村生涯学習課長>

今森館長が言っていたように、すぐに図書館支援センターっていうのは、やっぱり、人的にもそうですし設備とかそういうところがやっぱりなかなかすぐにはっていうところは難しいと思いますが、現場のニーズがあるっていうことは、そこは私達も応えていかなきゃいけないのかなと思っています。行政のやり方として、モデル的な、熱心な方がいるところ、例えば中村先生がいらっしやるような学校をまず舞台にして、そこを実践校にして、どんなことができるのかっていうのを考えて、それを横展開。こういうふうにやってくと、こういうことがうまくいきましたよ、と横に展開していくようなことができれば、理想的かなというような感じはしています。

<森館長>

ありがとうございます。今、市村課長さんおっしゃってくださったこともそうですし、瀧本委員が補足でお話してくださったように「センターを作ることありき」ではないわけですよ。やってみて、いい事例を広げていきたいということではないかなと思う。いくつかやり方があると思うが、一つは今年度中に一度フォーラムの形を考えたい。今日は協議会という会議体の場合だったけれども、こういうことに実は興味があるよという方にたくさん集まっていただいて、いろんな立場から、自由なご意見をいただきたい。そこから、ネットワークがつながっていくような、フォーラムができたらなというふうに考えている。繋ぎ手は、子供の読書に関して、何らかのはっきりとした役割を持っている、仕事上の役割を持っている人だけではないと思う。例えば、銀行や病院の待合室に、絵本とか置いてくれていたりしますよね。実は、関係があったんだね、みたいな世の中・社会の人たちを繋ぐみたいなことも可能性としてはあるのかなと思います。それ

なら自分にも関わり代がある、という感じで、それぞれの方が自分に引きつけられるようなものになっていけたらなっている気持ちもある。まずは、活動や学びや遊びがあって、そこに実は本もくっついてたね、と、流れ方を変えていくみたいなきができたらいんじゃないかなと思った。皆さん他にいかがですか。松山さん、いかがですか。

#### <松山委員>

さっきの田川さんおっしゃった本嫌いな人を集めるっていうのはすごいなと思って、ただ嫌いな人何嫌いって聞かれるとわかんないよなとも思うが、子供のなかには本を借りるのとかも行くのは苦痛な子もいる。絶対図書館行かないっていう子もいたりするので、そういう何が嫌いっていうか、やりたいことがあって、家に帰れば、やっぱりゲームをしたり、テレビとかその中で何かその知ることとか本を読むとか、その優先順位がなかなか上がってこないんだろうなと思うんですよね。なので、さっきもおっしゃったように、銀行に行けば待合室に本が置いてあったりとか病院も待ってる間に本読んでたりとかということは自然に結構みんなしてたりするので、何かそこがうまく本が好きになるように何かできたらいいなって思った。

#### <森館長>

ありがとうございます。最初に西山さんが、「この場合は県立図書館がそこにどんな役割を果たすのかって話なんですよね」とおっしゃってくださいました。

最後に、今後に向けての課題の頭出しをさせていただきたいと思います。自虐ネタというわけではないんですけども、まず我々が持っているリソースを冷静に直視したいと思う。机上配付をさせていただいた資料は、祖堅課長が各都道府県と県立長野図書館の比較をしてくれたものです。強み弱みとよく言いますが、当館の実績における全国順位を見ると、これは外に行くほど強く、内側に行くほど弱いんですが、弱い項目が多いです。具体的に全国順位の高いもの、高いって言っても22位くらいですが、来館者数は比較的多いです。長野県の北の端っこにあるわりには、来館者数は多い、貸出登録者数も比較的多いです。これはおそらく、本を貸すことだけが図書館の役割ではない、広く図書館を集う場、何かが発信されるが創造する場というコンセプトで「信州・学び創造ラボ」を中心とするさまざまな取組に、ここ数年力を入れてきた成果が表れていると見ています。本を借りに来る以外の方が、たくさん来ているということですね。それから登録数は、おそらく紙の本は借りないんだけど、電子書籍を借りるために利用登録をした方が一定数上乘せさせてきています。こういうところもあってここ数年頑張ってきた方向性に沿っていい数字が出てくるようになってきたんだと分析しています。それに比べて、全国順位の低いもの蔵書冊数、個人貸出数、学校からリクエストされて本を貸したり、相互貸借の部分が全国でかなり低いです。資料費は、一時期電子書籍で持ち直しましたが、まただんだん下がってきている。資料費の全国的な位置づけでは、今でも低いですが、いずれ電子書籍の予算がごそっとなくなったり、それから毎年のシーリングでだんだん減ってきているということから、かなり厳しいことが見て取れます。職員数は、会計年度任用職員の方も含めた人数ですが、かなり少ない

です。今回は頭出しということで委員の皆様にご覧いただきましたが、非常に厳しい状況にあって、予算・人的体制について、生涯学習課とも一緒になって、頑張っていきたいと考えていますが、従来型の見せ方ではなかなか主張が通らない、同じような説明をしても県全体の税収が落ちている中で通らないので、違う観点で見せ方を変えていかなければならないと考えています。

次回、年明け第2回目の会議で、皆さまと一緒に知恵を絞って一緒に取り組んでいけたらと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。本日は、ありがとうございました。